

19世紀中葉の英国におけるウェスレー派メソ ディズムの教育政策と民衆学校教育について（4）

—改正教育令との関連（7）— 3 —

青 木 秀 雄

目 次

はじめに

- I 1861年ウェスレー派の状況
 - （1）ウエストミンスター師範学校の増築
 - （2）ニューカッスル諮問委員会報告 （3）61年改正教育令覚書
- II ウェスレー派の見解
 - （1）教師の知識と教養 （2）3Rs と民衆教育 （付記）
- III 改正教育令の修正案
 - （1）1862年2月の修正改正教育令 （2）1862年4月の修正改正教育令
- IV 改正教育令発行と対応
 - （1）改正教育令の発行 （2）ウェスレー派教育委員会の対応
- V 改正教育令発行後のウエストミンスター師範学校の対応
 - （1）教員見習生制度と同師範学校 （2）教員資格試験合格者の推移
 - （3）同師範学校の再増築と財政難
- VI ウェストミンスター師範学校と教育実習校の変化
 - （1）師範学校の教科目内容の変化
 - （2）教育実習校におけるスタンダード試験
- VII 教員見習生減少の問題
 - （1）小規模校における教育環境の荒廃 （2）アシスタント教員の増加
- VIII ウェスレー派各基礎教育学校等のスタンダード試験対応
 - （1）ウェスレー派教育委員会の見解と基礎教育学校の状況
 - （2）スタンダードに対応する幼児学校（学級）の状況
- （以上、前号）
- IX ウェスレー派基礎学校の教育と学校視学官
 - （1）M・アーノルドとT・ヒーリングの関係と見解
 - （2）視学官と改正教育令

Ⅹ ウェスレー派基礎学校の教育と学校視学官

ウェスレー派基礎学校の教育に対する学校視学官の対応について再検討したい。シルベスターは、改正教育令以前に教師と視学官が友好的であったかどうかは疑問であるが、改正教育令以降は、確実に敵対関係になったと指摘した。しかし、メソディズムにおいては、その点においてどうであったのか。そこで小論では、先ず視学官M・アーノルドと視学官アシスタントであったT・ヒーリングに関連してそれを考察する。

(1) M・アーノルドとT・ヒーリングの関係と見解

T・ヒーリングの生い立ちと出逢い

1864年度のウェスレー派教育委員会報告書に、トーマス・ヒーリング (Thomas Healing) についての次のコメントが見える。同年3月に、ウエストミンスター師範学校を優秀な成績で卒業し、ハイバリー (Highbury) 地区の新設校 (改正教育令発行直後に廃校となってしまった) で、すぐれた教育経営に尽力したトーマス・ヒーリングが、視学官M・アーノルドのアシスタントに抜擢されたことを、ウェスレー派教育委員会は大変悦ばしく思う。¹⁾

そこで先ず、T・ヒーリングの息子アーノルド・ヒーリング (Arnold C. Healing) 著『トーマス・ヒーリング』によって、T・ヒーリングの生い立ちとアーノルドとの出逢いに触れ、次いで両者の教育に対する見識と態度について検討する。

T・ヒーリングが故郷チェルトナム (Cheltenham) で入学した週日学校は、ウェスレー派礼拝堂の地下に付設された小さな学校であった。カリキュラムも貧弱ではあったが、そこには大変大きな教育的影響力を与えたパーシヴァル (W. R. Percival) 校長がいたのが幸いであった。彼はD・ストウのグラスゴウ師範学校を卒業して、道徳的人格形成と知的な教育において素晴らしい資質を有していたので、後々までヒーリングの成長にも大きな影響を与えた。²⁾

ヒーリング13歳のとき、ロンドンの英国教会の民衆初等学校・ハロウエイ (Holloway) に未認可の教員見習生として転校した。学力と人物において優れていたもので、半年後には英国教会の堅信礼を受けさせ、正式な教員見習生として認可してもらうことを校長が熱望した。しかし、両親共にウェスレー派の教徒であり、特に母親が篤い同派教徒であったために、その申し出をどうしても受け入れなかった。そこで、故郷に帰ってチェルトナム校の教員見習生に認定されることになった。

19歳のとき女王奨学生試験に主席で合格し、ウエストミンスター師範学校に1857年入学した。そして、1859年12月にウエストミンスター師範学校を卒業し、ロンドンのハイバリー (Highbury) 地区に新設されたウェスレー派の学校に校長として赴任する。ここでの4年間に彼は教育業績を大いに上げることができた。1863年1月に、ウェスレー派の牧師の娘、アセナス・コードル (Asenath Caudle) と結婚した。³⁾

M・アーノルドはメソディズムと何ら関係なかったが、1851年にウェスレー派等の非国教会の学校担当視学官となり、翌年ヒーリング14歳のとき、故郷チェルトナム校の教員見習生として許可したのが最初の出逢いであった。次いで、彼のハイバリー校での教育実践

力を高く評価したアーノルドの推薦によって、1864年4月に視学官アシスタントに任命され、以来彼はアーノルドと、次いでモレル博士（Dr. Morrell）という2人の学校視学官を補佐することになった。⁴⁾

学校視察の態度と見解

視学官アーノルドとアシスタントのヒーリングは、独特のコンビとして学校を視察した。アーノルドの表現によれば、「ヒーリングは完全な紳士であって、常に彼独特の優れた熟慮と期待に満ちて接し、教育方法を無理強いすることは決してなかったので、教師たちは各々彼らの最上の教育実践を見せることができた」という。そして毎回、彼ら教師が未だものにしてはいないが、もう少しで確保できる教育的事項の詳細を重点的に確認して付け加えるのだった。ヒーリングは、彼自身が一人の教師であったことを決して忘れなかった。A・ヒーリングは、『トーマス・ヒーリング』の副題として「子どもたちをこよなく愛した人、教師の中の教師」と付け加えている。そして、自分自身の経験から、教師実践とその目標の達成がいかに困難であるかを自覚していた。彼らの長所に対しては勿論、また困難を大胆にも克服したときには、共感的で惜しみない激励と賞賛を与えた。教師たちの仕事を明るく照らし出す、太陽のような存在であったという。視察して学校を後にするとき、親切な示唆と明瞭な例示を必ず残していった。彼の報告書は、賞賛と批判において優れた洞察で満ち溢れ、教師たちを親切で勇気付ける批評は多分に啓発的であった。⁵⁾

以上のようなヒーリングの視察状況に対する評価は、以下で述べるようなアーノルドの言動に対する評価を参照すると、アーノルド自身の彼に対する影響力がいかに大きかったかが明らかである。

アーノルドは公式の報告書に次のように記している。ウェスレー派の各学校においては、その教育活動によってだけでなく、メソディズムそれ自身の原理と特徴によって、正しい考え方と同時に、善良な感情と品行を形成するための教育に全力をあげている。教師は穏やかで愛情深く、子どもたちへの教育と同時に、自己教育に努めていて、仕事を通じて知り合った教員たちは、すべてこのような建学の精神に満ち溢れていた。彼らが教育に専念するのは、視学官から賞賛されるためだけではなく、むしろ子どもたちが大人になったとき、たとえ教科書の内容は忘れても、教師の愛情と温かな言葉に満ちた、楽しい思い出で小学校時代を懐かしんで欲しいとの切実な願いからであることがわかる。ウェスレー派の学校が、その最善を尽くして向上・発展しているのは、このような精神からであると心から信じる。⁶⁾

また、1847年から枢密院総裁兼枢密院教育委員会総裁・ランズダウン侯（Marquis of Lansdowne）の私設秘書であったアーノルドは、1851年4月15日に学校視学官に任命さ、同年6月に28歳でルーシーと結婚した。1886年に35年間の視学官生活を辞任する際、担当区域であったウエストミンスター区の小学校教員主催の送別会が同年11月12日に開催された。その挨拶で次のように率直に述べている。⁷⁾

「私は学校教師の息子（父はラグビー校の高名な校長であった——筆者加筆）でありませんが、実をいうと、学校で教えることや学校を視察することはもともと進んで選んだ人生行路ではありませんでした。この航路を選んだのは、今晚ここに同席し、みなさんからの

暖かい親切にたいして、私と同様に心から感謝している婦人、この夫人と結婚するためでありました。(拍手喝采)」そして当時、英国全体で3人しか視学官がいなかったのも、その視察地域が広大で、遠方へと移り住まなければならぬ多忙な毎日であったか、また最初の1年程度は、この煩わしい職務に耐えきれない思いをどれほどしたかについて述懐し、次のように続けた。

自分の職務同様に煩わしく、しかも給料の低い「彼ら(教師―筆者加筆)が最善を尽くして努力している姿を目撃した。彼らが活気にあふれ効率的に、各自の職務を遂行している姿を目撃しました。そこで、ふたたび自分で自分に問いかけました。彼らは、いったい、どうして職務に励んでいるのであろうか? 私にとっては、私自身を彼らの立場に置き、彼らの心情のなかに入り込み、彼らの生活を思い描くことが徐々に習慣になってきました。こうして、彼らから多くの教訓を学んだと確信しています。こうしたことを通して、私は彼らに共感を覚えるようになりました。」アーノルドは優れた詩人でもあったので観察眼に優れ、知性と共に、素晴らしい直観力と感性を兼ね具えていた。

次のエピソードは有名である。アーノルドがウエストミンスター師範学校における年度末の国庫助成に係る資格試験(クリスマス試験)実施のために試験監督をしているとき、枢密院教育委員会委員長・サンドフォード(Sir Francis Sandford)が突然現れ、アーノルドが受験生に背を向けて忙しく書き物をしているところを見咎めた。アーノルドいわく、「閣下、それは全く必要のないことです。ウエストミンスター校の者は、誰一人として監督する必要がありませんので。」しかしながら、彼は違った方法で見守っていた。学校視学官というよりは、一人の人間として、その教育実践に対して興味を持って臨んでいたし、問題がある場合には進んで援助した。⁸⁾

一方、「児童はヒーリングの視察を心待ちにしていた」という。というのは、「彼はしばしば視察ということを脇に置いたようにして、教師と児童にとって忘れがたい記念のような優れた授業をしたからである。恥ずかしがりやや、スローな生徒に対する彼独自のやり方は、他人がまねできないような方法で行われた。例えば先ず、ひょうきんで親切的な握手と面白いしかめっ面をし、おかしい質問をすることによって、恥ずかしがりやや、不活発な子どもの状況を消し去って後に、やがて試験の目標に沿った質問をした。」児童が常に最善を尽くせるようにしたのである。⁹⁾

以上のことから、アーノルドとヒーリングは、確かに息の合った独特のコンビとして、ウェスレー派の基礎学校に多大な影響を与え続けたことがわかる。1970年上級視学官となったアーノルドとアシスタントとしてのヒーリングの担当地域は、「1970年小学校教育法」(枢密院教育委員会副総裁W・E・フォスター＝アーノルドの義兄によって策定された)施行以後、ロンドン中央部のウエストミンスター地区となった。結局両者は、1882年まで18年間協同して学校視察を行った。アーノルドは、1884年に主席視学官となり1886年辞任した。

(2) 視学官と改正教育令

知識の伝達と文化・教養(culture)の向上

1846年体制下では、視学官は学校に対して、学校側の要求に応じて助言することは可能

であったが、現実的にはなんら拘束力を有していなかった。視学官報告書は、中央における補助金額決定のあくまでも資料として扱われていた。視学官と学校は直接的な利害関係に立っていなかったために、両者の関係は友好であった。そこで、ニューカッスル委員会は、視学官報告書は信頼性が低く、表現・内容共に抽象的過ぎると指摘したのである。同委員会は視学官報告書および視学官自身へのインタビューも参考としつつ、独自の調査を行ない、視察校全児童の4分の1しか教育らしい教育を受けていないと判断した。同時期の視学官報告書では、全児童の約9割が良い教育を受けていると報告されている。同一の対象を前に、正反対の結論が下されたわけである。

ロウは自分が視学官に責任を負う役職にいたにもかかわらず、ニューカッスル委員会報告書の事実認定を正しいものとして採用した。その理由として、「視学官報告書において述べられていることは、教師の資格や徳目といった教育の質についてである。彼らの報告書から読み取れないのは、教師の労働の結果であり、彼らが子どもたちのためにどれだけ骨を折り、苦労したのかということである。我々の視察はいつも、そしてこれからもこの点を確かめることができない」と述べた。9割の子どもが良い教育を受けているという報告の意味は、9割の教師の教授法が良いということである。視学官はそうやって学校の効率性を測ってきたのであった。しかしロウは、学校の効率性とは、子どもがどれだけ教育を受けたかということで測られる、すなわち、子どもの試験の成績によって測られるべきであるとしたのである。

つまりロウは、従来の視学官による学校の効率性を測る判断基準が、極めて恣意的であることを問題とし、改正教育令によって、それまで漠然としていた視察を、記録簿のチェックと試験制度という、少なくとも明確な判断基準と視察内容をもつものに組み替えた。また、この改正教育令によって視学官の仕事量は増大し、それまでの視学官補の職は廃止され、1863年からは公務員試験に合格した基礎教育学校校長経験者の中から、アシスタントが採用されることになった。¹⁰⁾ このような事情により、ヒーリングはアーノルドのアシスタントに採用されたのであった。

M・アーノルドは、1862年2月13日の上・下院に改訂教育令典が提出された直後に、「再改訂法典」(The Twice-Revised code)を『フレーザーズ・マガジン』誌3月号に匿名で執筆した。その中で彼は次のように指摘している。

ニューカッスル委員会の報告書では、多くの貧困児童が、小学校を出た後も依然として無知であることを指摘している。その原因として、教師が下級クラスを捨てて顧みないこと、その一方で上級クラスにあまりにも欲張った野心的な教育を行っていることが指摘され、これによって基礎的な教育である3 R'sを全児童に十分授けられない、とされた。だがアーノルドは、この原因は過酷な幼年労働によって、在学期間が短すぎる児童が多いからである、との視学官ウォトキンの言葉を引用している。彼は改正法典に反対する議員たちが、「国家は、知的伝達の機関としての小学校よりも、文化の向上の機関としての小学校により大きな関心をもつ」べきであるとの見解に立脚していることを知っていた。¹¹⁾ ニューカッスル委員会は間違いなく誤解をしている、として次のように批判した。

そのように多くの児童が、生涯にわたって持続する重要な真の能力を習得できないのは、そうした多くの児童を学校に通わせる家庭の中に書物や知識への関心がまったく欠けてい

るからである。つまり、彼らの環境全般に、教養が欠けているからである。したがって、彼ら貧困児童にこのような能力を習得させる道は、彼らの階級の教養を向上させるより他にはなく、児童を読み方の学習に縛り付けることではないし、また教育課程から地理や歴史の科目を排除することでもない。¹²⁾ このように彼は、「家庭の中に書物や知識への関心がまったく欠けている」ので、このような労働「階級の教養を向上させる」ためにも、初歩学校からの文化的教育の必要性を指摘した。

しかし、このことは独特の組織であるクラス（バンド）を基礎とするウェスレー派には当てはまらない。メソディズムにおいては、ウェスレーを頂点とした教派集団として、巡回区—会(societies)—クラス（classes）という強固な組織体を確立していた。その下部組織として、12名以内で構成されるクラス（バンド）・ミーティングは、聖書研究と個々人の宗教体験上の問題について考えるために毎週開かれた。そこにおいては、霊的体験の事実や道徳的な行為の困難さが皆で話し合われた。各々のクラスには、メンバーの霊的探求を導く能力や宗教的高潔さをもった、理知的な平信徒のクラス・リーダーがいて、他の教派とは際立って本質的に、教育的機能を有していた。

クラス・ミーティングは、メンバー同志による親密で真剣な交流の場となっていたが、より知的な交流サークルとして、しばしば読書会（reading-circles）を内蔵していた。このような読書の重視は、本を供給する一種のクラブを生み出し、週日学校や日曜学校の図書館を発展させていった。読書会に入会した労働者は、宗教、科学、政治や社会問題を主題にした本を買うことができ、もしくは借りることができた。このような読書重視の精神は、ウェスレーが始めて以来、メソディズムの組織の根本にあって、同派の学校教育運動を生み出す豊かな情熱の源泉である。¹³⁾

例えば、ヨーク市近郊のCopmanthorpe村の農家に生まれた、ウェストミンスター師範学校の校長J・スコットは、教育暦としてはその村の学校で3R'sの教育を受けただけであったが、幼少より母親に連れられてクラス・ミーティングによく通った。11歳になったとき、同派信徒として同地域の会(society)に入会している。¹⁴⁾ もっとも、メソディズムに対して造詣が深くなっていたアーノルドは、当然このようなことは知っていたのであろう。したがって、むしろ上記の見解は、ウェスレー派のこのような伝統を踏まえ参考にしたと考えるべきであろう。

このアーノルドの『再改定法典』に先立ち、J・スコットは1862年1月30日のウェストミンスター師範学校での入学式の講演で、改正教育令に反対し、果たして「教員は教育され過ぎているであろうか」と問い、「教師は知らないことは教えられなし、教養(culture)を身につけていなかったら、文化(culture)を伝え与えることはできない」ことを強調している。「改正教育令は、11歳以上の子どもには、国家予算による教育は必要ないという。わが国の工業による国家的富は、労働者の腕と思考力とによって築かれているにもかかわらず、である。」¹⁵⁾

この講演は「労働者階級の人々よ、良い教育を受ける権利がある」(The Working Classes, Entitled A Good Education)と題され、同年2月に出版された。その表紙には、「個人的な見解ではあるが、教師が多くを学び過ぎ、彼の受けた教育を全で一貫して教授するなどということはあってはならない」という、枢密院教育委員会議長グランビルの同

13日付上院議会での演説が附記されている。

「初等教育 (primary education) に対する、現在の高度に教育された高給取りの教員資格教諭より、古き助教制度の方が相応しい」として、政府枢密院教育委員会は今日までの教育政策を大いなる失策として改定しようとしているのである。¹⁶⁾ 教師自身の高い教養 (the higher the cultivation of the teacher's own mind) は、果たして基礎教育に不適切であろうか。それは初歩学校の基礎教育に直結するものではないが、教科書 (lesson-books) の内容について、常に子どもの現実的な興味を関連付けて喚起させることができる。つまり教科書を読むことは、正しく言葉を獲得すると同時に、思考の原材料を与えることである。段階を踏みつつ、この教材をどのように利用するかを教えることが教育課程 (school process) である。したがって、十分に教育された教師ならば、子どもを十分考えさせて理解へと導き、見たもの聞いたことをよく観察させ、考える習慣を育てることができるのである。¹⁷⁾ このように彼は、教師教育の重要性を訴えていた。

出来高払制と視学官制度の近代化

『再改定法典』は続けて次のようにいう。これまで国家は、国家自身になんらの関係もない事柄に対して補助金を交付してきたと主張する。あるいは、国家がその補助する学校に要求するものは、できるだけ多数のものにできるだけ多量の読み書き計算を授けることであって、それ以外の何物でもないと主張する。¹⁸⁾ より高度の教養を身につけようとする下層階級のこの熱心な努力が、国庫補助に値しないというのはなんとも納得がいかない。この熱心な努力が指導を必要とすることは確かであり、これに指導を与える権利を確保するための唯一の手段は、いくらかでも補助金を与えることである。

しかし今日は、この問題を詳しく論ずるのに都合のわるい時代である。アメリカの提示する悲惨な光景 (南北戦争) を前にして、いまやヨーロッパ全体に吹きまくっている、民主主義にすこしでも似ているように思われるあらゆるものに敵対する反動的気分の風潮は、現在のところ阻止しようとしてもむだである。しかし、より高度の教育に関する主張がどうであろうと、「国家の要求するもの」が読み書き計算の効果的な教授だけではなく、さらに国庫補助基礎学校の「規律と能率、全体的性格」であることはまったく疑う余地がない。これらの要求 (規律と能率、全体的性格) に対して、ニューカースル委員会は明らかに国庫補助を交付しようとしたが、改訂法典はまったく交付しようとしな。現在支出されている補助金総額の5分の2を切りつめようという。これだけ削減しても、残りの金額で読み書き計算の向上を十分に助成できるという。¹⁹⁾

ロウはすでに枢密院教育委員会副議長就任直後から、視学官制度の近代化を図っていた。視学官は実質的には各宗派への帰属意識が強く、教育委員会の教育政策に対しても、自由に批判することが許されていた。たとえば年に一度ロンドンで開かれる全国視学官会議において、視学官は教育委員会の政策の支持・不支持の票決をとってさえたのである。ロウの前任者アグリーがこの票決を禁止した。次いで、ロウはこの会議自体に反対した。そうすることによって、視学官に、視学官とは教育委員会に属する行政職であることを確認させたのである。しかしながらこのことは、それまで相対的に自律的な地位を有していた視学官たちから反感を買うものであった。ロウと視学官との反目は、国会の場で視学官不

信を公言したり、視学官報告書を信用せず、ニューカッスル委員会報告書を支持したりしたことによって、さらに強まっていった。

また、この改正教育令によって、視学官はそれまでの教師との間の友好関係をもはや維持できなくなったということは、すでに多くの研究者によって指摘された。シルベスターは、改正教育令以前に教師と視学官が友好的であったかどうかは疑問であるが、改正教育令以降は、確実に敵対関係になったと指摘している。²⁰⁾ しかしながら、検討したように、ウェスレー派教育委員会と視学官との関係は、改正教育令以前も以後も良好であった。

結局は改正教育令において、視学官制度はその宗教的色彩を薄め、中央に組織される教育行政制度機構の一機関として明確に位置づけられた。ロウは、従来の視学官による学校の効率性を測る判断基準が、極めて恣意的であることを問題とし、改正教育令によって、それまで漠然としていた視察を、記録簿のチェックと試験制度という、少なくとも明確な判断基準と視察内容をもつものに組み替えたのであった。²¹⁾

後に、「読み方、スペルや計算が合っていて、ただ合格できた児童が何人いるかだけの、スロットマシンのような、改正教育令の出来高払制度の下で、視学官、教師と生徒たちの幾多の個性と理想が窒息させられたことか。形式的な報告書を執拗に要求されたことにより、何と多くの教員と視学官の民衆教育に対する情熱が徐々に打ち砕かれたことが計り知れない」と、A・ヒーリングは批評している。²²⁾

「アーノルドの夢は一需要供給の法則や出来高払制によるのではなく、また読み書き計算だけによるのではなく、詩と文学によって、正しい理性と麗しい文化によって、生の拡充と人格の完成によって支えられた豊郁と香る教育の機会均等を一初等・中等・高等段階を通じて一保障すべき真に民主的な国家公教育制度を確立することにあつた。」という。²³⁾ 「読み書き計算」の出来高払制に、依然として立脚する改正教育令に対し、アーノルドは絶対に承服でなかった。以後も年次査察報告書を通して出来高払制の矛盾と弊害を訴え続けた。そうした訴えが功を奏したのか、出来高払制は1867年を皮切りに数回にわたって修正を経た後、終に1897年には全面的に廃止されるに至った。アーノルドが亡くなってから9年後のことであった。²⁴⁾

以上検討したように、ウェスレー派教育委員会とM・アーノルドおよびT・ヒーリングは、思考力につながる本来の意味での3 R 'sを児童に身につけさせる意味においても、「教養」の基礎を培う教育が不可欠であると強く考えた。また、それが国家の義務であることを、アーノルドとスコットは強調した。一方、ロウは出来高払制によって、学校視学官を中央に組織される教育行政制度機構の一機関に位置づける政策を図ったが、アーノルドはそれに対し一貫して抵抗した。

前述したように、シルベスターは、改正教育令以前に教師と視学官が友好的であったかどうかは疑問であるが、改正教育令以降は、確実に敵対関係になったと指摘した。しかしながら、メソディズムにおいては、ウェスレー派教育委員会と視学官との関係は、改正教育令以前も以後も良好であったと考えられる。このことについては次号で、他の視点からさらに講究したい。

【註】

- 1) *The 25 Annual Report of the Wesleyan Committee of Education. 1864*, London, 1865, p. 33.
- 2) Arnold C. Healing; *Thomas Healing, Lover of Children, Teacher of Teachers*. London, J. W. Butcher, unknown the date of publication, pp. 4-7.
- 3) *Ibid.*, pp. 12-5. pp. 24-6.
- 4) *Ibid.*, p. 29.
- 5) *Ibid.*, pp. 36-9.
- 6) Prichard, F. C.; *The Story of Westminster College 1851-1951*. London, Epworth Press, 1951, p.33
- 7) マシュー・アーノルド (小林虎五郎訳) 『再改定法典』 (*The Twice-Revised Code. 1862*) p.137 (P. Smith and G. Summerfield (ed.) *Matthew Arnold and the Education of the New Order*. Cambridge University Press, 1969.)
- 8) Prichard, F. C., op., cit. p.32.
- 9) Arnold C. Healing, op., cit., p. 40-1.
- 10) 太田直子『イギリス教育行政制度成立史-パートナーシップの原理の誕生』東京大学出版会, 1992, pp. 62-4。
- 11) マシュー・アーノルド, 前掲書, pp. 17-8。
- 12) 同前書, p. 43。
- 13) 青木秀雄「英国民衆教育の展開についての一考察—19世紀前半のメソディスト派を中心として」岡田正章編著『教育の真理と探求』明星大学出版部, 1993, pp. 316-7。
- 14) The Christian Times紙, 1868年3月21日号。
- 15) Scott, John ; *The Working Classes Entitled to a Good Education, An Address to the Students in the Westminster Training Institution, January 30th, 1862*. London, John Mason, 1862, P. 18-9.
- 16) *Ibid.*, P. 3-4.
- 17) *Ibid.*, pp. 6-8. 青木秀雄「19世紀中葉の英国におけるウェスレー派メソディズムの教育政策と民衆学校教育について (4) —改正教育令との関連 (1) 1861年改正令に対する対応」『明星大学教育学研究紀要』第14号, 1999. 3, p. 50.
- 18) マシュー・アーノルド, 前掲書, pp. 43-6。
- 19) 同前書, pp. 47-9。
- 20) 太田直子, 前掲書, P. 64。
- 21) 同前書, PP. 65-6。
- 22) Arnold C. Healing, op., cit., p. 30.
- 23) マシュー・アーノルド, 前掲書, p. 133。
- 24) 同前書, pp. 24-5。